
クク人と故郷カジョケジ

——南北スーダンにおける人間の移住と場所の変容

飛内 悠子 Yuko Tobinai

上智大学 Sophia University email: fryfish011079@yahoo.co.jp

故郷とはどのように創られていくのだろうか。そしてそれが移住を経験した人にとっての帰るべき場所となるにはいかなる過程があるのだろうか。本論文は、南スーダン出身のクク人が、植民地化や内戦等による移住を繰り返す中で「カジョケジ」と呼ばれる場所を故郷として眼差すようになる過程を見ていくことを通して冒頭の疑問に答えることを目的としている。

クク人は東ナイル系の民族であり、内戦等の事情で多くがその地を離れた経験を持つ。彼らが現在故郷とみなす南スーダン共和国旧中央エクアトリア州カジョケジ郡は、ベルギーによる植民地支配期に名付けられた場所であり、彼らは移住を繰り返す中、各地のクク人同士による相互作用を通しカジョケジを「ククの故郷」とし、さらにはカジョケジはククにとどまらず、カジョケジ出身者すべての故郷とみなされる場合もあった。

そして第2次内戦終結後、カジョケジに帰還し、そこでの生活を経験した人々は、避難先での生活を背景としながら、カジョケジにおける生活を通してカジョケジの中でのそれぞれの「ホーム」を見出していく。だが、「外」に対する時は変わらずカジョケジはククという民族にとっての故郷である。

[カジョケジ、クク、南北スーダン、移住、帰郷、故郷]

I はじめに

II ククの概要と彼らの移住

- 1 クク人の概要
- 2 クク人と移住

III 見出される「故郷カジョケジ」と新たに付される意味

- 1 見出される「故郷カジョケジ」——雨の首長の改葬
- 2 カジョケジに付された新たな意味

IV 転地と定地の間——生きられる場所としてのカジョケジがもたらすもの

- 1 帰還概要
- 2 ホームとはどこか——J村での生活を巡って

IV おわりに——人と場所の関係を巡って

I はじめに

2005年の包括的和平協定締結により1983年から22年続いた第2次スーダン内戦が終結した。それに伴い、南部スーダンの内外で避難・移住生活を送っていた人々の帰還が現実味を帯びることになった。だが、様々な理由を背景とした長い避難・移住生活は彼らの生活スタイルの変容に深く影響を及ぼしており、彼らが故郷とみなす場所もまた変容していた。このような状況下での帰還は、彼らにとって希望であった反面、不安を伴うものでもあった。

本論文は南スーダン共和国の最南部に位置する、旧中央エクアトリア州カジョケジ郡を民族の「故郷」とするクク人の故郷観の形成過程を見ていくことを通し、人間と故郷という場所との関係について考察することを目的としている。

故郷は帰還、帰郷との関わりから論じられる場合が多い [cf. 大川 2016]。帰還移動 (return migration) に関する研究が盛んになったのは1970年代と考えられるが [cf. Gmelch 1980]、その研究が進展するにつれて様々な帰還の形が明らかになると共に、人々の帰還先となる故郷の構築性や多元性に関しても言及されるようになった¹⁾。

1990年代後半から2000年代にかけ、難民・強制移動研究に従事する研究者たちを中心として人間と場所との関係を巡る論争が交わされた。この論争の展開を見ていくことによって人類学者の故郷に対する認識の変遷を見て取ることができる。

この論争の背景には1990年代後半に盛んに論じられた移動する人間と場所との関係性に関する議論がある [Malkki 1995 ; Allen (ed.) 1996 ; クリフォード 2002 ; カプラン2003]²⁾。それをいささか乱暴にはあるが要約すれば、グローバル化が急速に進展していく過程で、人間と場所との関係は決して固定されたものではなく、時代や状況によって構築され、変化していくものだということが明らかにされてきたということになる。

難民・強制移動に関する人類学的研究の泰斗の一人である、リサ・マルキによるタンザニアにおけるブルンジ難民を描いた『純粋とエグザイル』 [Malkki 1995]、そして北東アフリカにおける難民の帰還に関する論集『よりよい場所をもとめて』 [Allen (ed.) 1996] で議論された人間と場

所との関係は本質的なものではなく、構築されるものであるという考えに対し、同じくアフリカの難民について調査を行っていたガイム・キブリアブが *Journal of Refugee Studies* において反論を行った。キブリアブはマルキらの議論をグローバル化と共に進展するとされる脱領土化の文脈の下におき、しかしながらそれは自身が住む場所を強制的に追われ安息の地を求める人々には当てはまらず、故地 (homeland) や常居所 (habitual residence) といった場所は彼らにとって権利と成員権の担保先として重要であるとし、難民の帰還は現在でも最も有効な非自発的移動問題の解決方法であると主張した [Kibreab 1999 : 408]。

この反論に対しコメントを行った、エチオピアに住む農業牧畜を生業とするムルシの人々を長年調査してきたデイビッド・タートンは、自身の論文に対するキブリアブの解釈を修正し、彼が調査してきたムルシの人々と場所との関係が多面的であること、タートン自身は権利と成員権の担保先としての場所の重要性を否定してはいないこと、そして自身の領土への愛着とアイデンティティへの関心は、「脱領土化」やグローバル化のインパクトといったポスト・モダンの議論からではなく、早期の人類学における領土拡大と東アフリカの牧畜民の間におけるエスノジェネシスの議論から生じたものだと説明した [Turton 1999 : 421-422]³⁾。

そして2009年に帰郷を巡る論集を出版したジャンセンとロフヴィングは、この論争に言及し、自分たちはこのどちらにもくみせず、「私たちはこれらの二つの意見 [キブリアブとマルキ・タートンのもの] が完全に共存しうることのみならず、互いを強化していることをも主張する」 [Jansen and Löfving (eds.) 2009 : 5] という。そしてナショナリズムと故郷概念とを無批判につなげることに警鐘を鳴らす。

彼らの主張は、キブリアブに対するタートンの反論を踏まえていないという問題があるにせよ、タートンの主張を拡張したものであると言えるだろう。本論文も基本的にはこの主張に従う。しかし、まだ明らかになっていない部分がある。

人と場所との関係が構築的、かつ多面的なものであることは疑いない。その一方で人々が一つの故郷とのつながりを求めるのもまた事実である。

そして人は自身の民族的ルーツとなる場をそこが生まれ育った場所ではなくても故郷と呼び、そこへ帰ることが彼らの希望となる場合がある。このような状況はいかなる過程を通じて生じたのだろうか。

本論文ではある民族と彼らの故郷とされている場所との関係の形成過程とそれを踏まえた現在に注目することによりこの疑問に答えたい⁴⁾。南スーダン最南部、カジョケジ郡を民族の故郷とするクク人、特にハルツーム在住経験者と彼らの故郷カジョケジとの関係の事例を取り上げる⁵⁾。それは第2次スーダン内戦後の南スーダンにおける帰還の実情を示すと共に、場所と人間の移住との関係性の新たな一面を見せるものとなるだろう⁶⁾。

なお、本論文は2007年から2011年までは主にハルツームにおいて、2011年から2013年までは主にジュバ、カジョケジにおいて断続的に計26カ月間行ったフィールド調査によって得られたデータに基づいている。調査における使用言語はアラビア語ハルツーム方言、ジュバ・アラビア語、クク人の民族語であるバリ語、英語である。

ここで本論文において頻用される単語に関する整理を行っておく。本論文では多数のスーダン領域を表す単語が使われる。そのうち、1956年から2011年までのスーダン共和国すべての領域を示す場合には南北スーダン、南部領域を示す際は南部スーダン、北部に関しては北部スーダンとする。2011年の南スーダン独立以降は南スーダン領域を南スーダンと呼び、スーダン共和国領域は北スーダンとする。また、本論文において帰郷とは英語のreturn homeもしくはhomecoming、ジュバ・アラビア語では*raja bate/beled/watan*、バリ語では*ite bot/jur/mede*の訳語とする。ただし、各言語の間の完全な翻訳が可能かと言えばそうではなく、むしろその差異に注目することこそが本論文の目的の一つでもある。そして帰還をrepatriationの訳語とする。本論文では基本的に帰還とは難民、もしくは避難民とされる人が故地、もしくは故国とされる場所へと向かう行為を示す。これは国際機関などの定義と同じものである。従って本論文においては、両親は南スーダン出身だが本人はハルツーム生まれで、南スーダンにはじめて行くといったような場合であっても、上記の定義に従って帰還と記述する。帰還民も同様で

ある。つまり、本論文においては帰郷と帰還の意味は同一である場合と、異なる場合がある⁷⁾。

上述の通り、筆者は調査の際複数の言語を用いている。これは調査対象者が複数言語使用者であるためである。特にハルツームで人生の大部分を送った若いクク人にとって第一言語は民族語バリ語ではなく、アラビア語であることに注意を促しておきたい。

II ククの概要と彼らの移住

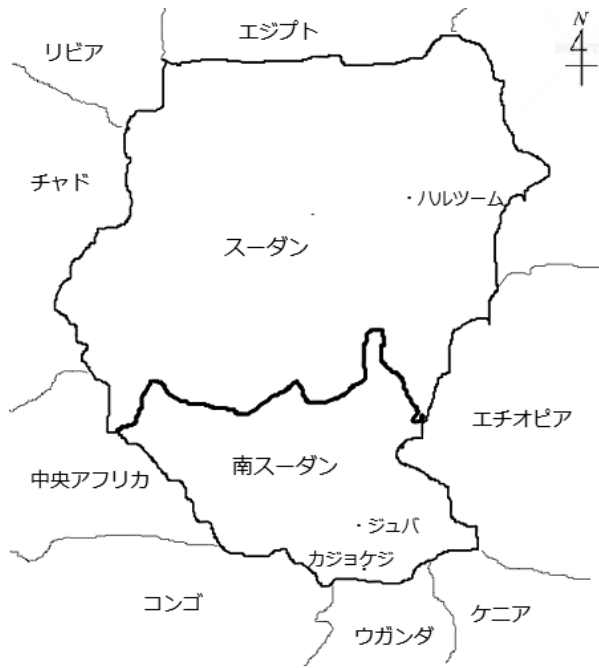
1 クク人の概要

クク人とは、南スーダン最南部、ウガンダと国境を接する旧中央エクアトリア州カジョケジ郡(Kajo-keji County, Central Equatoria State)⁸⁾を故郷とする民族である。

クク人が南スーダンの諸民族の中でどのような位置を保っているのかについて見ていくために、いったん南スーダンの民族構成について簡単に説明したい。南スーダンには60以上の民族があり、そのうち最大人口を持つのは西ナイル系のディンカ人である。続いて同じ西ナイル系のヌエル人、シルック人と続く。ディンカ、ヌエル、シルックといった比較的規模の大きい民族は南スーダン北部に居住しているのに対し、南スーダン南部、エクアトリア地方と呼ばれる地域には中小規模の民族がひしめき合っている。彼らは時に自分たちをエクアトリア人(Equatorian, Nas Istwaiya)と称することがある。多くはディンカ、ヌエルといった大きな民族に対する際である。クク人はそのエクアトリア人を構成する一民族であり、南スーダンの中では近代教育への関心が高いことで知られている。

クク人の人口は約20万人、民族語は東ナイル系のバリ語の一方言であるクク語⁹⁾、クラン外婚制をとっており、生業は農耕、牧畜である。その人口の7割がキリスト教徒と推定され、最大教派はスーダン聖公会(Episcopal Church of the Sudan)である。

カジョケジ郡は南スーダン南部、ナイル川西岸の北緯3度、東経31度付近に位置し、4月から11月までが乾期、12月から3月までが雨期に分かれる熱帯気候の土地である。カジョケジもしくはカジョカジ(Kajo-kaji)とは、バリ語で「檻の中の(たくさんの)牛」という意味を持ち、1890年



地図1 南北スーダン（筆者作成）



地図2 カジョケジ郡（筆者作成）

代から1910年代ごろに存在した一人の首長のあだ名であった [Stigand 1923 : 69]。標高が約700メートルと高いため、南スーダンの他の地域に比べ気温が低く過ごしやすい。

2012年の時点でカジョケジ郡は下部行政組織として5つのパヤム (payam)¹⁰⁾を持ち、それぞれのパヤムはいくつかのボマ (boma) を統括していた。ボマの下部組織として村 (village) がある¹¹⁾。村は基本的には父系クラン (*kōji*, *tokakat*) ごと

に組織されており、世襲により受け継がれるクランの首長 (*matat*) が村長となる場合が多い¹²⁾。カジョケジ郡の住人は郡境界地域を除けばほとんどクク人で占められているとされる¹³⁾ が、ニエポに住む人は自身をニエポ人であるという場合がある。また、リレとカナポの住人の中には、自分たちを「真のククである」と言い、ニエポとリウォロの住人はそれに劣ると考えている人もいる。当然ながらニエポとリウォロの住人はそれに反発、

もしくは劣等感を抱く。

ハルツーム、ジュバ、そしてウガンダの難民村やクク人集住地区といった彼らの移住先において、カジョケジがククの故郷 (*jur/beled/homeland*) であるという言説は揺らぐことはなかった。だがカジョケジという地名が欧米人の侵略以降につけられたものであり、ククがカジョケジの外から移動してきたという言説もよく聞かされるものであることを考えると、「空間は名付けられることによって人間に承認される」[レルフ 1999 : 59] というレルフの言葉通り、ククの民族的故郷がカジョケジであるという見方が構築されてきたものであることがわかる。ここではカジョケジという地名が登場し、それがクク人の間で「ククの故郷」として認識されるようになる過程を追ってみたい。

そもそもククにとっての故郷とは何を示すのか。クク語で故郷¹⁴⁾を何というのかと尋ねれば、「それは*jur*である」という答えが返ってくる。だが、この*jur*という単語はたいへん多義的な単語である。村、国、そして民族すべてを*jur*という単語で表す。1908年に出版されたバリ語の辞書によれば、*jur*とは土地 (land) と国 (country) のこととされている [Owen 1908 : 134] が、1930年代にデータを集め、1960年に出版された辞書には*jur*が村、そして部族 (tribe)、民族 (nation) を示すことが記されている [Spagnolo 1960 : 79]。そして現在、村、民族に加え、国家も*jur*で示す。この多様な意味は何を示すのか。この問いに答えるためのヒントを同じナイル系に属するヌエル人の事例から得ることができる。ヌエル人も*jur*とよく似た使われ方をする単語を持つ。それは「home」¹⁵⁾を意味する*cieng*である¹⁶⁾。エヴァンズ＝プリチャードはこの*cieng*という単語について詳しく検討し、この語に多様な意味が付されているのは「言語的に矛盾があるわけではなく、この語が示す集団価値の相対性によるものだ」[エヴァンズ＝プリチャード 1997 : 238] と言っている。カジョケジの路上であなたの*jur*はどこかと聞かれれば村の名を答えるし、ウガンダで同じ質問をされれば南スーダンだと答える。問われる文脈により、*jur*が示すものは変わる。ここから、*jur*とは他者によって規定される「自己」のルーツとなる場と言える。つまり、他者に出会わなければ、ある場所が*jur*だとは認識されない。「他者」に出

会う大きなきっかけの一つは移住であろう。では、クク人はどのような移住を経験してきたのだろうか。

2 クク人と移住

クク人の歴史家スコパス・ポグゴは、ククを含む東ナイル系の民族集団に属する人々が5世紀ごろ現在の北スーダンから移動を開始し、分離、定住をくり返したと、そしてククが13世紀ごろ先住の民であったマディーモルグループに属する人々を追いやりカジョケジ領域へと移動してきたと論じている [Poggo 2014]¹⁷⁾。

ポグゴによれば、ククとはカジョケジ領域へと住み着いた移住者 (immigrant) 集団の集合体である。初期にカジョケジ領域へと移り住んだとされるククのクランはキニユバ (Kinyi'ba) とカンデバ (Kande'ba) であり、彼らはマディー人たちを追い出し、最も肥沃で豊かな土地を占有し、自分たちを土地の主 (*monyé kak*) と名乗った。そして移動の波の最終段階時に来たのがカスラク (Kasurak) クランであり、彼らは牛を持ち、そして雨師をカジョケジにもたらしたとされる [Poggo 2014]。

そしてカジョケジ領域内に落ち着いたのちにもクク人はその中で移住したと考えられる。筆者のカジョケジにおける調査拠点であったJ村の住人は、ほぼキニユバクラン出身者で占められていると言われる¹⁸⁾。実はキニユバという地名はJ村ではない場所に存在している。そしてJ村の住人たちは、自分たちはもともと現在のキニユバ周辺に住んでいたのであり、そこから移動して現在のJ村付近に住むようになったのだと説明する¹⁹⁾。ここからは移住がククのアイデンティティを創り上げていった可能性を見てとることができる。ククはククとしてカジョケジ領域に来たというより、そこに集まったことによってククになったといえるのではないだろうか [cf. Turton 1996]。

そしてカジョケジという地名が歴史の中に登場するのは20世紀以降である。南スーダン南部は1840年代まで外部勢力の侵入が行われなかった土地である。1820年にハルツームを侵略したムハンマド・アリー朝は、それから20年をかけて徐々に南部スーダンへと手を伸ばした。だが、このときのムハンマド・アリー朝にとって南部スーダンは象牙と奴隷の供給地に過ぎず、北部から来

た商人が「商品」を入手するのが北と南との出会いであった。1850年代にはカトリック宣教師が現在のジュバ付近で布教を開始した。このころから少しずつ南部スーダンと外部との接触が行われるようになった。

1869年に開始された副王イスマーイールの意をくんだサミュエル・ベイカーのエクアトリア侵攻を機に、カジョケジ領域はオスマン・エジプト領エクアトリア州の一部とされた²⁰⁾。マフディー軍と欧米諸国、そしてオスマン・エジプトによる土地の攻防戦の舞台となったラド・エンクレイブ (Lado Enclave) と呼ばれたカジョケジを含むナイル西岸の一地域は、1894年から1910年まで英国からベルギーのレオポルド2世の支配下にあったコンゴ自由国に租借された後、英国に返却されている [Stigand 1923 : 1 ; Collins 1962 : 123]。このベルギー支配期にカジョケジ居留地 (station) が設置された。ラド・エンクレイブを訪れたワンジェルメは1909年に出版された手記にククの首長の写真を載せ、それがカジョケジの近くで撮られたものだと説明をしている [Wangermee 1909 : 26]。また、1910年に出版されたククの民族誌にも筆者の滞在地としてカジョケジの名が見られる [Plas 1910 : 15]。

ラド・エンクレイブが英国に返却されたのち、カジョケジはディストリクトとしてモンガラ州に編入された。そしてこののち、2015年に南スーダンが28州となり、カジョケジ郡が解体されるまでカジョケジはディストリクト、もしくは郡の名前として地図に載り続けた。しかしカジョケジがククの故郷として認識されるには、クク人たちがカジョケジ以外の場所と出会う必要がある。それを可能にするのはやはり移住である。

その歴史からもわかるようにクク人は古来より移住を繰り返していた。そのスケールが距離的に拡大するのは植民地勢力の侵入以降である。人々は次第に就業、就学の機会を求めて都市へと移住を始めた。1940年代にはウガンダ南部への移住が盛んになり、1960年代には第1次スーダン内戦によりカジョケジの治安が悪化したことにより多くの人が北部ウガンダの難民居住地、もしくは親族を頼ってウガンダ南部へと逃れた。そして第1次内戦終結後多くの人が帰還し、さらに1970年代後半には南部スーダンの中心都市ジュバへの

移住が盛んになった²¹⁾。そして1983年に始まった第2次内戦の戦火が1987年にカジョケジまで到達したため、彼らは再びそこを後にしなければならなかった。

現在、ウガンダ南部のブゲレレ、ムコノにはククの集住地区があり、多くのクク人はそこに住む親族、もしくはそこでの生活経験を持つ。ジュバはカジョケジに次いでクク人の人口が多い土地であると言われている。そしてこのジュバが第2次内戦時政府軍の拠点であったことも理由の一つとなり、ジュバからハルツームへと移住、もしくは避難する人が増えた。ウガンダであれ、ジュバであれ、ハルツームであれそこはクク以外の者が住む場所である。移住したクク人たちは他者と出会うことにより、ククである、もしくはスーダン人、南部スーダン人であるという自己認識を強めた [飛内 2011]。

以下の章では、ハルツームとカジョケジにおけるクク人の改葬への対応を見ることにより、カジョケジがククの故郷として認識されていく過程の一端を示すと共に、彼らが認識したカジョケジとはどのようなものだったのか、そしてそれがいかに変化したのかについて考えてみたい。

Ⅲ 見出される「故郷カジョケジ」と新たに付される意味

1 見出される「故郷カジョケジ」

——雨の首長の改葬

筆者のハルツーム、そして南スーダン滞在中、かなりの回数の葬儀が営まれ、そこには一定の割合で改葬が含まれていた。元来、ククは改葬を行わない。彼らは避難の地に葬られた彼らの親族を「父祖の地 (ancestral land)」へと葬るために改葬を行う。

なぜ、死者は父祖の地に葬られなければならないのだろうか。葬儀はクク語では *prit na twan* (死の場)、アラビア語では *bega* という。通常の葬儀と改葬でことばが使い分けられることはない。

1910年に出版されたククの民族誌の中に死者の魂に関する記述がある。それによると、そのころのクク人たちは人間が死んだあとと肉体は次第に滅びるが、「影 (*uletet*)」はその土地に残り、子孫を見守るのであるという。そのため「影」への供え物などを怠ると、「影」が子孫の夢に出て不満

を訴える [Plas 1910 : 279-280]。筆者も数人のクク人からこの話を「昔の信仰 (belief)」として聞いたことがある。また筆者が参加した葬送儀礼はキリスト教教会で行われ、死者の埋葬を終えた後、葬儀参加者のほとんどが村で宿泊したが、建物の中ではなく外で寝ていた。これをある聖公会司祭は「死者がすでに家の外に出ているからさみしくないように私たちも外で寝る」と説明していた。ここから人が死してなおその地に留まるという「昔の信仰」が現在もククの生活の中に息づいており、彼らはそれに従って死者を父祖の地に葬るのだということがわかる。第2次内戦終結後この改葬が盛んに行われるようになった。この改葬はククのカジョケジ認識と大きく関わる。

2010年に行われたある雨の首長²²⁾の改葬に関するハルツーム在住のククの対応について見ていきたい。当時ハルツーム郊外の移住者集住地区には南部スーダン出身の各民族、ダルフルやヌバ山地出身者、そしてエリトリアやエチオピア人たちが混住していた。同じ国内であったとはいえ、ハルツームは南部スーダン出身者にとって気候、言語が異なる異郷である。また、南北内戦(1983-2005)時、彼らにとってそこは敵の土地でもあった。様々な理由でハルツームへ移り住んだ人々は、他者と隣り合わせで暮らしつつ、民族や宗教などを基盤としたネットワークを再形成していた [cf. 飛内 2011]。2010年2月の時点でハルツームには1,500人ほどのクク人が滞在しており、彼らも他の民族と同様にクク・コミュニティ、そして聖公会カジョケジ教区支部を組織していた。このコミュニティが改葬にあたり大きな役割を果たした。

傑出した雨の首長として知られていたスコパス・ゴディ・アビナ・ヤンギ (Scopas Godi Abina Yangi、生没年不明) は、内戦によりカジョケジからジュバへと避難し、そこで亡くなり、埋葬された。この彼の遺体をジュバからカジョケジへと移す計画が持ち上がった。そして教会の礼拝や葬儀といったククの集まる場で雨の首長の改葬への支援に関するアナウンスがなされた。そこではカジョケジから改葬への支援の依頼が来ていること、現在カジョケジが雨不足に苦しんでいること、過去にも雨不足の際に雨の首長の改葬を行ったら雨がもたらされたという例があること、そしてこの

改葬への支援はカジョケジへの助けになると同時にハルツームに住むククの結束に役立つと言われた。会場に居合わせたクク人たちは寄付の依頼に快く応えていた。

これまで熱心なキリスト教徒としてのクク人の姿を見てきた筆者にとって、それはなんとも違和感を抱かせる光景だった。この改葬への支援の中心人物となっていた筆者の最も近いインフォーマントであったアベル²³⁾ は、釈然としない様子の筆者に対し、「もちろん、キリスト教徒である私たちは雨の首長の存在を信じていない。でもこれは各地に散ったククをまとめるのに役に立つ」と説明した。

このアナウンスに先立ち、ハルツームのクク・コミュニティ²⁴⁾の首長たちが行った会合の記録がある。これは当時コミュニティのセクレタリーであったアベルが記述したもので、英語で書かれている。筆者はアベルから原稿を直接受け取った。記録は4つのパートに分かれており、まず、会合の日時と出席者、アジェンダが記述され、イントロダクションとして改葬が計画された背景と、それを支えるハルツームのクク・コミュニティ、そしてキリスト教教会の組織についての簡単な説明がなされている。そして出席者の発言内容の記録のうちにその他の議題についての記録がある。

この記録からは、カジョケジの5つのバヤムすべてから出席者があったこと、スコパスの改葬と共に、有名な聖公会司祭であるカノン・ビナイア・ポグゴ (Canon Binaiah Poggo, 1935-1992) の改葬の計画もされていたこと、そしてビナイア・ポグゴの改葬に関しては聖公会が全面的に支援することになったため、クク・コミュニティとしては残るスコパスの改葬に関わることが決まったこと、さらに会合に出席した首長たちの中にこの改葬に反対する者はいなかったことがわかる。

もともとカジョケジにおける雨の首長の存在はかなり大きかった [Plas 1910 : 293]。そして彼らは死ぬと彼の石²⁵⁾がある場所に葬られた。その場所は彼の父が葬られている場所でもある [Plas 1910 : 259]²⁶⁾。彼らは死してなお雨を制御する力を持つと思われたのである。

では、今回の改葬はハルツームのクク人たちにとって雨の首長を葬るためのものなのだろうか。おそらくそうではない。なぜならハルツームにお

いて雨の首長の存在の影響はほとんどなかった²⁷⁾。記録ではカノンの改葬と同列に扱われていたうえに、スコパスを父祖の地、もしくはカジョケジに葬るとされていただけで、雨の首長が埋葬されるべき場所に埋葬するとはまったく書かれていなかった。さらには1910年の民族誌には改葬については書かれておらず、プラスの調査時の「カジョケジ」と現在のカジョケジ郡とでは範囲が異なる。

以上の情報から、雨の首長の葬儀、そして「影」の観念といったものを背景に、移住したクク人たちは死者を「カジョケジに帰す」ことに意味を見出していたと考えられる。そこには改葬される死者の出身村に帰すことより、あくまでもカジョケジに帰すことへのこだわりがみえる²⁸⁾。ここからわかるのは、ハルツームでの生活を通して変化しつつ、「ククであること」を認識した人々が、共通の故郷としての「カジョケジ」という場所を見出し、そこへ帰る、もしくは帰すことを望んでいたことである。

だが、カジョケジは単なるククの故郷を意味するに留まらなかった。

2 カジョケジに付された新たな意味

2012年7月、ジュバにおけるククの拠点教会である聖公会ゴシェニ教会の英語礼拝において学生組合の結成に関する会合についてのアナウンスがなされた。ハルツームでその結成イベントを見てきていた筆者は、なぜジュバでもう一度それをやるのか疑問に思い、教会併設の小学校で行われるというその会合に行ってみることにした。

そして遅れて会場に入った筆者は教室を埋め尽くし、熱心に議長の話聞いていた若者たちの視線を一身に浴び、挙句「ここは今ククだけで話合っている最中なので、参加者からの賛同を得たのちに次回あなたを招待します。今回はご遠慮ください」と丁重に追い出された。その翌週、正式に招待を受けた筆者は開始時間きっかりに会場に入った。ほどなく議長によって開始が宣言された。教室内は50人ほどの若者たちがいた。

議長は話し合うべき議題を述べたのちに、まずグループごとにその議題についての意見を出してほしいと言い、グループに分かれるよう指示した。ククにこだわった割には司会の言語は英語である。

グループ分けはカジョケジのパヤムを基準になされた。そしてグループごとの話し合いののち、そこでまとめられた意見をグループのリーダーが全体に伝えた。いくつかあった議題の一つが、学生組合の名称についてである。組合の名称にククを入れるべきかどうかで議論が紛糾した。

「ククの会合なのだから、ククと入れるべきだろう」という意見に、ひとりの男子学生が立ち上がり、ひどく流ちょうな英語、そして時折筆者にはクク語に聞こえることばを交えながら話を始めた。

「私はククじゃない。ニエボだ。ククはカジョケジに住んでいる人はみんなククだと考えているけど、それは違う。ニエボは自分たちをククだとは思っていない。クリス（議長）、私たちはウガンダの大学でカジョケジ出身の若者がまとまる必要性について話し合っていた。カジョケジ出身者 (*nyutu ti Kajo-keji*) の会合だから今日私は来たんだ。ククだから来たわけではない」

この意見は他の参加者にとっても見逃しがたいものであったようである。最終的に組合の名称にはククではなく、カジョケジが入られる方向で話が進んでいった。

この会合の様子からは、ククとカジョケジとのつながりの強さが見える。出席者の多くがウガンダ、ケニアでの学生生活の経験を持ち、英語で議事進行を行う若者であり、そしてカジョケジではなくジュバで会合を行っているのにもかかわらず、グループ分けはカジョケジのパヤムごとになされた。カジョケジ出身者であること、そしていずれかのパヤムの出身者であることが、ジュバにおいてもなおククの若者たちにとって重要であることがここからわかる。だが同時にカジョケジという場所がククと完全にイコールで結ばれるわけではないということがニエボ出身者のことばから見える。カジョケジという地名に民族を問わずカジョケジ出身者のシンボルとしての意味が付されつつあった。

では、移住先から帰郷したクク人にとってカジョケジはどのように映ったのだろうか。

IV 転地と定地の間

——生きられる場所としての カジョケジがもたらすもの

1 帰還概要

政府軍とスーダン人民解放軍 (Sudan Peoples Liberation Army: SPLA) との激しい戦闘の舞台に何度もなったカジョケジが、SPLAの「雷光作戦 (Operation Thunder Bolt)」によって「解放」されたのは1997年である。この「解放」以降人が徐々に戻ってきていた²⁹⁾。だが、本格的な帰還はCPA締結以降であった。

南部スーダン救済復興委員会 (Southern Sudan Relief Rehabilitation Commission: SSRRC) のカジョケジ事務所はその前身となった救済復興委員会の支部として1994年に設置され、人々の帰還と帰還後の生活の支援を行ってきた³⁰⁾。

SSRRCのスタッフによれば、カジョケジへの帰還の波は2回あった³¹⁾。1回目はCPA締結以降の2006年から2008年である。この時はウガンダ、そしてジュバからの帰還が多かった。特にウガンダ国境に近いリオロへの帰還は自主的帰還が多く、カナボヤリレにはウガンダの難民居住地から集団帰還した人が来ていたという。そしてニエポにはジュバからの帰還民が多かった。初期の帰還民は水や必要物資の確保などに苦勞し、荒れた農地を整備し、最初の収穫物を得るまでに1年かかるうえに、食料支援の制度も整っていないために相当苦しんだ。そこから2010年までは総選挙や住民投票による治安悪化を恐れて帰還者数が減った。そして住民投票が平和裏に終わり、独立が決定した後に2回目の波がきた。この時はハルツームからの帰還民もいたという。だがハルツームからの帰還民はカジョケジの全帰還民のうちの10%にも満たない³²⁾。

SSRRCは村長にレポート提出を求め、帰還民数を把握している。2009年からUNHCRの支援によって帰還後3カ月分の食料が帰還民に配られていたが、帰還民の数に支援が追いつかず、インタビュー時点で1カ月分しか配られていなかった。また住居や農耕のために必要な道具に関しての支援が必要だが、そういった支援は資金難からできていなかった。

2 ホームとはどこか——J村での生活を巡って ・アベルの帰郷とJ村

ハルツームで筆者が深く関わることになったアベルは1953年にカジョケジで生まれ、第1次内戦による治安悪化に伴い、ウガンダ南部に避難し、そこで中等学校を終了している。そしてジュバやハルツームで働き、1997年にジュバからハルツームへと家族で避難した。ハルツームで学士号と開発・平和学のディプロマを取得している。彼にはカジョケジのカナボ2パヤム出身の妻、そして3人の娘と末息子がいる。彼の家族の帰還は段階的に進められた。まず、2009年12月に彼の妻と息子がハルツームを発ち、そして2010年5月には娘2人がジュバに向かった。さらにアチヨリ人と結婚していた長女をハルツームに残し、彼は2010年8月にカジョケジへと帰郷した。

2010年3月に筆者がはじめて南スーダンを訪れた時には彼の息子カインはすでにカジョケジにおり、彼の妻マリアはジュバにいた。そして娘2人はジュバから学校に通うことになっていた。つまり、2010年にアベルがカジョケジに帰った時点では、ジュバに妻と娘2人、そしてカジョケジに息子がいるという家族が分断されていた状態であった。

彼は聖公会カジョケジ教区のスタッフとして働くと共に、ビナイア・ポッゴ・メモリアル・カレッ

表1 アベル一家³³⁾ (筆者作成)

氏名 (生年)	属性	職業	帰還後の居住地
アベル (1953)	父	聖公会司祭	リレ・カジョケジ
マリア (1959)	母	小売業	ジュバ
メアリ (1991)	長女	中等学校在学中	ジュバ
アナ (1993)	次女	中等学校終了	ジュバ
セツ (1995)	三女	中等学校在学中	カナボ・カジョケジ
カイン (2000)	長男	初等学校在学中	カナボ・カジョケジ

ジ³⁴⁾の講師として講義も行い、カレッジから与えられた農地を耕し、落花生やサツマイモを育て、生計を立て、子どもたちの学費を捻出していた。

そしてウガンダで教育を受けた彼はその教育制度を信頼し、自分の出身クランを誇りに思い、カジョケジでの生活を息子にも経験させたいと考えていた。カジョケジには南スーダンの教育制度で運営される学校と共に、ウガンダの教育制度によって運営される学校がある。そこで彼は息子カインを自分の実家のあるJ村に住ませ、そこから学校に通わせることにした。

ここでのちに示す事例の分析の基盤となるJ村と、アベルの息子カインが住む家の状況について説明しよう。

アベルの出身村はカジョケジ郡の経済的中心地ウドボマの市場近くのJ村である。J村の人口は2010年の時点で約900人。クランは一つの共同体として葬儀や結婚式を行うが、彼らの関係性には当然のことながら濃淡がある。

カインの新生活の舞台は、このJ村にあるアベルの末の弟ライの家であった。アベルの父は2人の妻を持ち、アベルの父と母に当たる女性はずでに他界している。アベルの兄はSPLAの元兵士で、長くウドボマの長を務めた人であり、彼の一家はウドの市場のすぐそばに家を持っていた。つまり、アベルの一族はカジョケジにおいてある程度の政治的権力を持っていたことになる。アベルの親族には高い学歴を持ち、ジュバをはじめとした南スーダンの各地、そしてウガンダで、ホワイトカ

ラーの職に就いている者も多くいる。

カインが寄宿することになった家の主人ライは妻と娘1人、息子を2人持っている。そして彼の家にはカイン以外にアベルとライにとって長兄に当たり、現在ラジャフで暮らすロウの娘も寄宿し、同じ学校に通っていた。

ライは1980年代末にカジョケジからウガンダへ逃れている。この避難により中等学校の卒業をあきらめざるを得なくなった。ウガンダで結婚し、カジョケジへと帰郷した後は一族の土地を耕して生活している。彼の妻は幼稚園の教師をしているが、その収入は微々たるものであり、子どもたちの就学資金には到底足りなかった。そこにアベルがハルトームから帰郷し、カインを預ける代わりにライの子どもたちの学費の援助を申し出たという。

系図を見ると、一家族の持つ地域的ネットワークの広さがわかる。基本的に高学歴を持ち都市に出た者とカジョケジの村に住む者とは現金収入に差があり、そうした格差は結婚式や葬儀といったカジョケジ内外から一族が集まる場で浮き彫りになる。ライは酒が入ると内戦により学業を断念せざるを得なかったことを嘆いていた。彼もほかの兄弟たちと同様に学歴を得てホワイトカラーの職に就きたかったのである。

カジョケジの村での生活は、親族を基本とした交流がその基底に置かれている。親族同士のつきあいは時には大きな助けとなる。だが一方、そうした近隣に住む親族同士でのつきあいは、それが

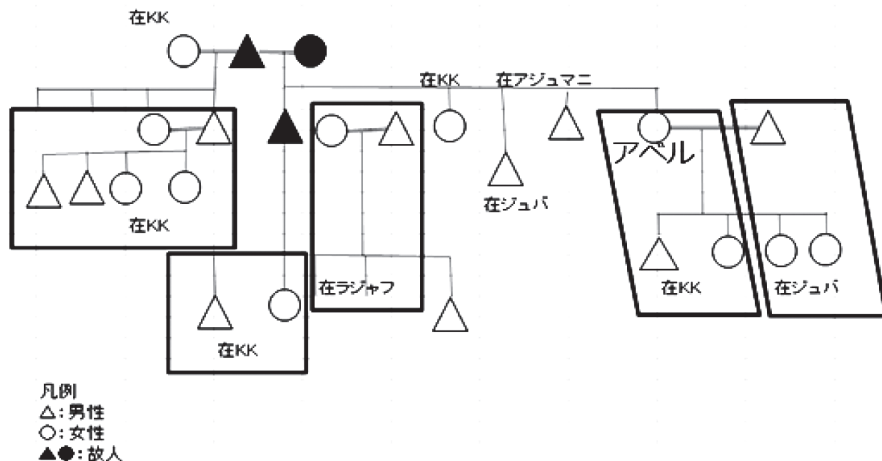


図1 アベル関連系図³⁵⁾ (筆者作成)

濃くなればなるほど互いの生活、自分の手の内を隠すことができない。それはある種の息苦しさも伴うものであった。カインはこうした状況にあった村で、ハルツームからの帰還民、そして教区スタッフの息子として新生活を送ることになった。

・「僕は自分のことばがわからない」

——カインの静かなる戦い

カインはアベル一家の中で唯一ハルツームで生まれている。育ったのはハルツーム郊外の移住者地区である。アラビア語を話す姉たちに囲まれて育ち、彼はアラビア語を第一言語として育った。筆者は2007年、彼が男性形と女性形があるバリ語の接頭辞naとloの違いがわからず、父親に聞いていた場面を目にしている。

だが2010年12月にカジョケジで彼と再会した時、筆者の目には彼は完全にカジョケジになじんでいたように見えた。従兄弟たちとクク語でやり取りをし、喧嘩をする。ガスポンベが容易に手に入ったハルツームとは異なり、薪で料理をする村の料理法に難なくなじみ、手伝いをする。心配された学業も彼の父が自慢するまでになった。

だが、ハルツームからの移住とウガンダ在住経験者に囲まれた生活はやはり、彼の自己形成に大きな影響を与えていた。筆者がそれを知るのはライの家でのひとときからである。

その夜はライの妻が葬儀のため出かけていて不在であった。ライの長女が豆のシチューを煮る横で、カインとカナが口喧嘩をはじめた。どうやらバリ語の言い回しについて争っているらしい。ジュバに近いバリ人の土地、ラジャフに父が住むカナはバリ語もジュバ・アラビア語も達者である。「違うよ！そんな言い方しないよ」とカナがカインのセリフに文句を言う。それに対しカインは「いや、その言い方はバリの言い方じゃないか、ククは違う」と言い返す。そしてあるカインのセリフに他の子どもたちが爆笑した。どうやら彼はクク語では使わない言い方を使ったらしい。英語が達者で、成績がよく、頭もよく回るカインは周りに愛されているが、彼の背伸びをした物言いは折に触れて子どもたちのからかいの対象になる。彼が間違えばこぞとばかりに笑われる。この一件以降、彼がクク語の言い回しに困っている場面が目につくようになった。ライの長女に確認

し、意図が通じなければ他の言い方を試していた。

ある夜、たき火の前で彼はアラビア語で「僕は自分の言葉がまだわからないんだ」とぼやいた。

弱冠11歳の子どもが言うにはあまりにも大人びた物言いである。彼はカジョケジの父の村で自分の一族と暮らしている。彼の母の出身村もここからそう遠くない場所にある。彼の父は教区スタッフで、将来に不安を感じる要素はそんなにはいはずだった。だが、彼のこのセリフは「異世界」に放り込まれ、自分と「他者」との距離を知り、それを縮めようと努力してきたが故のセリフである。そしてそれはカジョケジに移り住んだ後の彼の生活を垣間見せるものでもあった。

・「今故郷にいるの！」

——アナの帰郷とカインの反発

アベルは息子を実家に預け、妻と娘をジュバに置き、自分はロモギにある勤務先のカレッジのスタッフ用の寮に住んで教区の仕事にまい進していた。寮に住んでいれば大学で食事をとることもできる。彼は十分ではあったが、決して多いとは言えない給料をこうして節約し、子どもたちの教育資金を捻出していた。

長女のクリスはハルツームで結婚し、3児の母になったが父に連れられてジュバに移り、次女アナは通学の都合上からジュバの叔母の家に寄宿して中等学校に通い、三女セツはいったんジュバに落ち着いたのちに父の方針でカジョケジにある私立学校に移った。彼女たちは学校が休みの時やクリスマスなどにカジョケジを訪れていた。

筆者は2012年の2月末から3月にかけてハルツームとウガンダで調査を行った後に、4月半ばにカジョケジに向かった。はじめはアベルの住む寮に居候し、4月の末にウドのJ村に移った。2012年3月、ジュバで中等学校修了試験を終えたアナがカジョケジにククである彼女の友人と共にやってきた。中等学校の試験は3月に行われ、結果は6月に出ると言われていた³⁶⁾。この結果を待つ間カレッジに設置されたコンピューター・コースを受けるためにカジョケジに来たのである。

コースの開講が講師の都合によって延期されたため、アナたちは暇を持て余すことになった。父の持つ農地を耕すわけでもなく、勉強するわけでもない彼女たちの生活は、カレッジの人々にとっ

て理解しがたいものであったらしく、筆者に「彼女たちは何をしているのか」と聞くほどだった。

アナはしきりに友人に電話をかけ、近況を報告しあっていた。そこで必ず出るのが「今、故郷にいるの！(fi beled)」だった。アラビア語のバラドとは、故郷、もしくは出身地を示す単語である。ジュバにいる友人たちと話すとき、カジョケジは彼女にとって故郷であった。だが、カジョケジの住人に対する場合はどうだったのか。

アナのカジョケジ来訪は妹セツに救いをもたらした。セツは突然カジョケジに転校させられ、カリキュラムやことばの違いに戸惑い、休暇中には父の言いつけに従い寮で慣れない家事を一手に引き受け孤軍奮闘していた。それに対しアナは父の言いつけをあっさり無視し、自分のやりたいようにふるまった。さらにアナがいることによって家の中の会話にアラビア語が占める率が格段に高くなる。こうしてアナの来訪によってセツにとってロモギの寮は「家」となりはじめていた。父アベルも彼女たちの戸惑いと不満は承知していたとみえる。娘たちに厳しい姿勢を見せながらも、時に市場でインスタント・コーヒーを買い、パソコンで映画を見せ彼女たちを楽しませようともしていた。

それはその基盤に親族間交流があり、クク語が主要言語を占め、携帯の充電をするのにも市場まで出かけねばならなかった村の生活とは確実に異なるものであった。姉妹で自由に過ごすことができる寮の部屋は彼女たちにとっての一種のオアシスとなったと同時に、「ロモギ」はアナとセツ、そして村人にとっても村と異なる場所となっていた。

ロモギから彼女たちの父の実家、そしてカインが住むウドまではバイクで20分ほどかかる。公共交通機関はなく、バイクタクシーは高い。自然と彼女たちはカジョケジにいながら村での生活にはほとんど無関係に暮らすことになった。だが、一週間に一度だけ彼女たちが父の実家に行く機会があった。それは父が司牧を司る教会に日曜礼拝に出かける時である。その教会はウドにあり、英語礼拝を行っており、若者が多く通う教会である。ロモギにも教会はあったが、彼女たちはこの教会で礼拝を受けることを好んだ。この教会での礼拝の後、彼女たちもさすがに父の実家を素通りでき

ず、挨拶に訪れていたのである。

そのころカレッジの寮を出てJ村に滞在していた筆者から見て、一週間に一度の彼女たちの来訪は、「異邦人」の来訪だった。ジュバで買った華やかな服をおしゃれに着こなしてやってきた彼女たちは、弟と従兄弟たちの歓迎を受け、出されたマンゴーを食べ、ジュバ・アラビア語で声高に会話をした。会話の中身はカジョケジの住人にはわからないジュバでの友人の動向である。当然、村に住む従兄弟たちは会話に入ることができない。遠巻きにしてこの華やかな一群を眺めるのみである。本来ならアナはアベルの娘、つまり一族の一員としてライの妻を手伝うべき存在である。だが、この時アナはそういった扱いを受けていなかった。彼女は村人にとってアベルの娘ではあっても村の外の者であるとみなされていたのである。

教会での仕事を終えた父が来るのを待ち、市場で買い物をしてロモギに戻る。これが当初のアナと村との関わりだった。アナにとっておそらくわからなかったのは弟カインの態度である。彼は学校が休みになり、2人の姉がロモギにいても村を離れようとしなかった。そこで従兄弟たちと放牧に出かけ、農作業をするを選んだ。

ある日曜、自分の質問にぶっきらぼうに返すのみ弟の態度にいら立ったアナは、帰りがけ、弟にこう言い放った。

「ほらっ、シャワーを浴びて、出かける用意をしなよ、ロモギに帰るよ (birija Römögi)！」

それに対し、カインはあっさりと断った。

「行かないよ (ma biruwa)。僕は明日も畑を耕さなきゃいけないし、牛を放牧に追わなきゃならないんだから」

おそらくカインが感じていたのは筆者と同じ、アナの村における異邦人性である。アナにとってはカジョケジにおける家はロモギのカレッジの寮である。たとえ父の出身村であろうと村はこの時の彼女にとって帰る場所ではなかった。しかしこの時カインにとっては姉に従って「ロモギに帰る」とは、村とは別な場所に行くことであった。実はカインはアナがいない時、しばしばロモギの

寮に滞在しており、寮での生活にもある程度慣れていた。おそらく彼がロモギへと「帰る」ことができた時もあった。だがこの時、彼にとっての家はロモギではなく間違いなくJ村だった。つきあいの密度の濃い村での生活を必死に創り上げてきた彼は、村の家族にロモギという異世界側に自分がいることを見せたくはなかった。村人の前で決して「ロモギに帰る」と言うわけにはいかなかった。カインは苦勞して築きあげてきた自分の居場所を失うことがいやだったのである。

このようにアベル一家のカジョケジでの生活を見ていくと、移住先においては「カジョケジ」という、想像上の故郷であった存在が、実体を伴っていく過程が明らかになる。それは実体としてのカジョケジでの生活を通じ、それぞれの帰る場所としての「家」^{ホーム}が見出される過程でもある。アナにとってハルツーム、もしくはジュバを起点にすればカジョケジはバラド、つまり故郷であった。カインやセツにとっても同じであろう。だがカジョケジにおいてアナの「家」はウドではなく、ロモギにあった。それに対し、カインの「家」はウドにあった。彼らはカジョケジへの移住-移動し、そこに「住まう」[ハイデガー 2008]という行動を機にカジョケジへの視点を換え、そこにそれぞれのホーム——ある種の故郷を見出したといえる。それは彼らが帰還後の生活の中でそれぞれが関わる人との相互作用の中から生み出されたものである。

カジョケジにおけるハルツームからの帰還民は少ない。そのためアベル一家の事例がクク全体にどれだけ当てはまりうるのかは少々心もとない。とはいえ、カジョケジの住人の多くが都市に移住した親族を持つことを考えれば、本事例は都市に住む者と村に住む者——と簡単に分けることはできないが——との関係性を描きだすものということとはできるだろう。

IV おわりに

——人と場所の関係を巡って

本論文では、クク人の移住の歴史を背景とし、移住先で、カジョケジという場所が、故郷という意味を持った一つの場所として想起される過程、さらにその意味が変容していく様子を描き出した。そしてさらに移住先で長く過ごし、故郷としての

「カジョケジ」を見てきた人、特にカジョケジでの生活の経験を持たない若年層が帰還後現実としてのカジョケジを知り、それぞれが帰る場所としてのホームを見出す過程、そしてそのホームがどのような意味を持つのかについて見てきた。その結果、ククにとって故郷とはクク語の*jur*の意味そのままに相対的な意味を持つ存在であることがわかった。

ここで故郷が構築され、ある種絶対的な存在となっていくにはいかなる過程があるのかという冒頭の疑問に答えてみたい。避難・移住を経験したクク人にとってカジョケジは間違いなく故郷であるが、それは彼らが移住生活を送る中で、カジョケジ内外間のコミュニケーション等を通じて構築されたものである。そして帰還後現実としてのカジョケジを目の当たりにしたことにより、彼らは故郷カジョケジへの見方を再度変化させ、それぞれのホームを見出したが、他者に対する際にはカジョケジはいつでも故郷であった。つまり、ある場所が他者との関係を通じて民族、もしくは個々人の故郷として認識される過程の中で、自身の拠り所の一つとなったがゆえに、そこは重要で代えがたい場所ともなったのである。

そしてこの移住した人と故郷との関係は、場所の構築過程において重要なその担い手について論じるうえで、完全なる「他者」でも「内部の者」でもない移住者という新たな担い手の存在を示すことができる [cf. 河合 (編) 2016]。それと同時に人間が居所を変えようという行為が、移住する者自身、そして彼らが関わる場所に何をもちこたせるのかという疑問への一つの答えを提示しよう。

周知の通り、南スーダンは現在内戦の最中であり、多くの人が避難生活を余儀なくされている。カジョケジの住人も例外ではなく、2017年1月の政府軍による民間人への攻撃を機に多くの人がカジョケジを逃れた。避難先であるウガンダの難民居住地で行われた日曜礼拝においてカジョケジ教区主教は「イエイ川州」と「カジョケジ」が平穩になるように祈っていた。イエイ川州とは2015年に新たにカジョケジ領域が属することになった州の名である。南スーダン政府による一方的な策定の産物であったイエイ川州がククの故郷として名指されていた。

そしてある教会指導者はこういった。

「私たちは故郷を忘れることはできない (*Yi nyobulo böjö jurlikan*)。だがここに来ることができたのはよかった」

繰り返される内戦を背景とし、移住を繰り返すククにとってカジョケジの意味、そして故郷が指し示すものはおそらく変容し続ける。今後も彼らの土地、故郷観の変容過程を見続けていく必要があるだろう。

謝辞

本論文は2013年度提出の博士論文の一部を大幅に改稿し、新しいデータを加えたものである。博士論文の審査をしていただいた先生方、また本論文の元となる草稿を大阪大学、文化人類学会次世代育成セミナーで発表した際に、コメントをいただいた方々にこの場を借りて感謝を申し上げる。

注

- 1) 帰還、もしくは帰郷に関する人類学的先行研究の総括的レビューはすでに他の研究者が行っているためここでは行わない [ex. Long and Oxfeld (eds.) 2004 ; Markowitz and Stefansson (eds.) 2004 ; Jansen and Löfving (eds.) 2009 ; 大川 2010]。
- 2) クリフォード、カプランの原著は共に1990年代後半に出版されている。
- 3) こうした反論を受けてか、キブリアブはのちに人間と場所との関係構築の過程との関わりから帰還を論じた論文を書いている [Kibreab 2004]。
- 4) 帰郷/帰還する先となる故郷は多層的であり、一つであるとは限らない。だが、本論文では民族的な故郷に焦点を絞る。故国としての故郷、もしくは民族的故郷ではない場所へと帰還した人々に関しては稿を改める。
- 5) 本論文ではハルツームから南スーダンへの帰還の実際については詳しく論じていない。これに関しては拙稿 [飛内 2011] を参照していただきたい。また、第2次内戦終結後の南スーダン人の帰還に関しては、国際機関による報告書のほかに、時代的制約により数は限られるものの、すでに調査成果が公開されている [Hovil 2010 ; Kaiser 2010 ; Jansen 2011 ; Grabska 2014]。
- 6) また、故郷の重要性を訴える言説は、国際機関により難民問題の恒久的解決方法の一つとされた帰還において大きな影響を及ぼしてきた。故郷が「難民」もしくは移住者にとってどのような存在なのかを考え直すことにより、この国際機関の帰還支援のあり方を考えるうえで有益な示唆を導き出せる。
- 7) 帰郷と帰還の定義、使い分け方は統一されていない。特に違いを設けず使う場合 [Hammond 2014] もあれば、報道では国内避難民の帰還をreturnと表示し、難民の帰還をrepatriationとする場合もあった。また、ロングはrepatriationをre-patria、つまりパトリアを再び創る行為とみなし移住を経験した人々が故郷に政治的に関与する行為も含めて帰還と呼ぶ [Long 2013]。本論文では登場人物の多くが国際機関や政府が関わるrepatriationプロジェクトの対象者となり、その行為が帰還と呼ばれることを考慮し、上記の定義を採用する。従って本論文において帰還民はrepatriatesの訳語となる。
- 8) 2015年10月に新たに州が編成されたことによって、現在はイエイ川州 (Yei River State) となっているが、混乱を避けるため筆者のフィールド調査時の所属を示す。
- 9) 中央エクアトリア州にはバリ語を話す民族が6～7あると言われており、民族ごとに方言を持ち、それを指してクク語という場合もある。だがバリ語話者同士であれば相互理解が可能である。本論文では通常バリ語とするがクク語特有の言い回し等に言及する際はクク語と記述する。
- 10) カナボ1、カナボ2、リレ、リウォロ。
- 11) この行政組織は1997年にカジョケジがSPLAによって「解放」されてから始まったとされる。
- 12) 近年、特に1970年代後半以降はカジョケジ郡内部での人口移動が盛んになったこともあり、市街地では必ずしもクランごとに村が構成されているわけではない。
- 13) 現在の南スーダンの各郡は必ずしも一民族と呼応しているわけではないが、中央エクアトリア州に関してはその傾向が強い。すなわち、ジュバ郡はバリ人の、ライニャ郡はボジュール人の、イエイ郡はカクワ人の、そしてカジョケジ郡はクク人の土地とみなされていた。
- 14) 英語で尋ねる場合はhome/homeland、アラビア語で尋ねる場合はbeledの意味を尋ねることになる。
- 15) 翻訳書では家と訳されているが、混乱を避けるためhomeとする。
- 16) もちろん、ヌエル語の意味も時代とともに変化している。グラブスカは*cieng*が故郷、もしくは共同体を意味するのと同時に、現代においてはそれが文化の意味を持つことも論じている [Grabska 2014 : 11]。ただし、クク語の*jur*に文化の意味はない。それは*keri*であらわされる。

- 17) ポッゴの論文は2014年のSudan Studies Association Annual Conferenceにおける発表原稿であり、ページ数が記載されていない。
- 18) J村がカジョケジの経済的中心地ウドボマの近くにあることもあり、実際は他のクランやボマ、村出身でウドの市場で店を構える人がJ村内に土地を借り住んでいる。
- 19) その理由には様々なものがあった。またそれがいつごろか、正確な時期は聞き取ることができなかったが、聞き取ったデータから考え合わせると、現在50-60代の人々の3世代前ぐらいだろうと考えられる。
- 20) それはエクアトリアにすぐ実質的なオスマン・エジプト政府の支配が及んだことを意味するわけではない [Simonse 1992 : 93-97]。
- 21) 移住自体は1920年代から始まったと言われる。この移住に関してここでは詳しく論じない。クク人のジュバへの移住に関しては拙稿 [飛内 2013] を参照していただきたい。
- 22) 雨をコントロールする力を持つ首長。南スーダンの中央、東エクアトリアには雨の首長制が広く認められる。この雨の首長に関しては植民地期の旅行記において何度も言及されているのをはじめ、人類学的研究の蓄積もある [Baker 1868 ; Toniolo and Hill (eds.) 1974 ; Seligman and Seligman 1928 ; 栗本 1986, 1987 ; Simonse 1992]。
- 23) 本論文に登場する人物にはすべて仮名を使用する。
- 24) ハルツームのクク・コミュニティは1988年に設立され、ハルツームに住むクク人の相互扶助を担っていた。ハルツームに点在していた移住者地区ごとに首長が、それに加えて大首長とチェアマンが一人ずつ置かれた。
- 25) 雨を制御する石。石は雨の首長の父の墓所にあるとされている [Plas 1910 : 293]。
- 26) Yunis [1924] にも雨の首長の葬儀についての描写があるが、こちらには埋葬される場所に関する記述はない。
- 27) 筆者がハルツームで雨の首長について見聞きしたのはこのときだけである。
- 28) スコパスがどこに葬られたのかは定かではないが、同時期に改葬が行われたビナイア・ポッゴが出身村ではなく、神学校の敷地内に葬られたことからそれがわかる。
- 29) 現在のウドにある聖公会の教会が建つ土地の提供者でもある長老は、教会の歴史を語る中で第2次内戦中一時教会を放棄せざるを得なかったが、1997年以降戻ってきた人を中心に再建設を図った

ことを述べている。

- 30) 1994年当時、カジョケジは戦闘の最中にあっただけ、SSRRCがどれほど活動できたのかには不明な点が残る。
- 31) 2012年4月24日、SSRRCカジョケジ事務所での職員に対するインタビュー。
- 32) SSRRCカジョケジ事務所では独立後からインタビュー時までのカナポにおけるハルツームからの帰還民を521人としている。この時点でのカナポ1、2バヤムの総人口は10万人を超えていた。
- 33) 職業は2012年5月時点のもの。
- 34) 聖公会付属の神学校。
- 35) 2012年6月時点。これは完全なものではない。筆者はアベルが何人兄弟を持っているのかを確認することができなかった。それでもこの系図を示すのは、アベルの一族のネットワークの広さを示すためである。
- 36) だが北スーダンのカリキュラムで教育を受けていた彼女たちの試験結果の到着は、当時の南北間関係の悪化によってだいぶ遅れることとなった。

参考文献

- エヴァンズ=プリチャード、エドワード・E
1997 『ヌア族——ナイル系一民族の生業形態と政治制度の調査記録』 向井元子訳、平凡社。
- 大川 真由子
2010 『帰還移民の人類学——アフリカ系オマーン人のエスニック・アイデンティティ』 明石書店。
2016 「帰還から故郷を問う」『文化人類学』80(4): 534-548。
- カブラン、カレン
2003 『移動の時代——旅からディアスポラへ』 村山淳彦訳、未來社。
- 河合 洋尚 (編)
2016 『景観人類学——身体・政治・マテアリティ』 時潮社。
- クリフォード、ジェイムズ
2002 『ルーツ——20世紀の旅と翻訳』 毛利嘉孝訳、月曜社。
- 栗本 英世
1986 「雨と紛争——ナイル系パリ社会における首長殺しの事例研究」『国立民族学博物館研究報告』11(1): 103-161。
1987 「雨の首長の受難——南部スーダン・東エクアトリア地方に関する文献資料から」『アフリカ研究』30: 95-105。

- 飛内 悠子
 2011 『「国内避難民」とは誰か——スーダン共和国
 ハルツームにおけるクク人の歴史・生活・ア
 イデンティティ』上智大学アジア文化研究所。
 2013 「ゴシェニ教会とクク人——都市ジュバから
 見る南スーダンのキリスト教」*Journal of Area
 Based Global Studies* 4 : 31-60。
- ハイデガー、マルティン
 2008 『ハイデガーの建築論——建てる、住まう、
 考える』中村貴志訳、中央公論美術出版。
- レルフ、エドワード
 1999 『場所の現象学——没場所性を越えて』高山
 岳彦他訳、筑摩書房。
- Allen, Tim (ed.)
 1996 *In Search of Cool Ground: War, Flight &
 Homecoming in Northeast Africa*. UNRISD.
- Baker, Samuel
 1868 *The Albert Nyanza: Great Basin of the Nile and
 Explorations of the Nile Sources*. J. B. Lippinott
 & Co.
- Collins, Robert O.
 1962 *The Southern Sudan 1883-1898: A Struggle for
 Control*. Yale University Press.
 1971 *The Land Beyond the Rivers: The Southern
 Sudan, 1898-1918*. Yale University Press.
- Gmelch, George
 1980 Return Migration. *Annual Review of Anthropology*
 9: 135-159.
- Grabska, Katarzyna
 2014 *Gender, Home & Identity: Nuer Repatriation to
 Southern Sudan*. James Carry.
- Hammond, Lura C.
 2014 “Volauntary” Prepatiation and Reintegration.
 In *The Oxford Handbook of Refugee and Forced
 Migration Studies*. Elena Fiddian-Qasmiyeh,
 Gil Loescher, Katy Long, Nand Sigoma. Oxford
 University Press.
- Hovil, Lucy
 2010 Hoping for Peace, Afraid of War: The
 Dilemmas of Repatriation and Belonging on
 the Borders of Uganda and South Sudan.
 UNHCR New Issues on Refugee Working
 Paper Series No 196.
- Jansen, Bram
 2011 *The Accidental City*, Ph.D. thesis. Wageningen
 University.
- Jansen, Stef and Staffan Löfving (eds.)
 2009 *Struggles for Home Violence, Hope and the
 Movement of People*. Berghahn Books.
- Kaiser, Tania
 2010 Dispersal, Division and Diversification:
 Durable Solutions and Sudanese Refugees in
 Uganda. *Journal of Eastern African Studies* 4
 (1) : 44-60.
- Kibreab, Gaim
 1999 Revisiting the Debate on People, Place,
 Identity and Displacement. *Journal of Refugee
 Studies* 12 (4) : 384-410.
 2004 Belonging, Displacement, and Repatriation
 of Refugees: Reflections on the Experience
 of Eritrean Refugees. In *Displacement Risks
 in Africa: Refugees, Resettlers and Their Host
 Population*. Itaru Ohta and Yntiso D. Gebre
 (eds.), pp.116-161. Kyoto University Press.
- Long, Katy
 2013 *The Point of No Return: Refugees, Rights, and
 Repatriation*. Oxford University Press.
- Long, Lynellyn D. and Ellen Oxfeld (eds.)
 2004 *Coming Home?: Refugees, Migrants, and Those
 Who Stayed Behind*. University of Pennsylvania
 Press.
- Malkki, Lisa H.
 1995 *Purity and Exile: Violence, Memory, and
 National Cosmology among Futu Refugees in
 Tanzania*. University of the Chicago Press.
- Markowitz, Fran and Anders H. Stefansson (eds.)
 2004 *Homecomings: Unsettling Paths of Home*.
 Lexington Books.
- Owen, Roger C. R.
 1908 *Bari Grammar and Vocabulary*. J & E Bumpus,
 LTD.
- Plas, Vanden
 1910 *Les Kuku: Possessions Anglo-Égyptiennes*.
 Institut International de Bibliographie.
- Poggo, Scopas
 2014 *Who are the Kuku People?* Non-published Paper
 for the 33rd Annual Conference of Sudan
 Studies Association.
- Seligman, Charles G. and Brenda Z. Seligman
 1928 The Bari. *The Journal of the Royal Anthropological
 Institute of Great Britain and Ireland*: 407-479.
- Simonse, Simon
 1992 *Kings of Disaster: Dualism, Centralism, and the
 Scapegoat King in Southern Sudan*. E. J. Brill.

- Spagnolo, Lorenzo
 1960 *Bari English Italian Dictionary*. Missioni Africane.
- Stigand, Chauncy H.
 1923 *Equatoria: The Lado Enclave*. Constable & Company Limited.
- Toniolo, Elias and Richard Hill (eds.)
 1974 *The Opening of the Nile Basin: Writings by Members of the Catholic Mission to Central Africa on the Geography and Ethnography of the Sudan 1842-1881*. C.Hurst & Company.
- Turton, David
 1996 *Migrants & Refugees: A Mursi Case Study*. In *In Search of Cool Ground: War, Flight & Homecoming in Northeast Africa*. Tim Allen (ed.). UNRISD.
- 1999 Responses to Kibreab. *Journal of Refugee Studies* 12 (4) : 419-422.
- Wangermee, Émile
 1909 *Grands lacs africains et Katanga: Souvenirs de Voyages*. J. Lebègue & Cie Libraire-Éditeurs.
- Yunis, Yuzbashi R.
 1924 Notes on the Kuku and Other Minor Tribes: Inhabiting the Kajo Kaji District. *Sudan Notes and Records* 7 (1) : 1-141.

(2017年9月28日採択決定)

Kajo-keji as the Home of the Kuku

Transformation of Place through Peoples' Migration
 in the Two Sudans

Yuko Tobinai

[Kajo-keji, Kuku, the Two Sudans, migration, return home, home]

Following the end of the second Sudanese Civil War (1985–2003), those living as refugees both inside and outside Sudan have become aware of the imminent approach of their repatriation. However, it is not simply a matter of returning home, as both the people and the place have been changed by the war.

Anthropologists have shown that the relationship between humans and a place—especially ‘home’—has the qualities of plurality and flexibility. At the same time, they have established that ‘the home’ is ultimately important for people. The question of how that situation has developed, though, has not been answered. How is a homeland defined? How can it be ‘the place of return’ for people who have experienced migration?

This paper explains the process by which the Kuku, an ethnic group in South Sudan, have come to recognize Kajo-keji as their home. The author sheds light on that process by citing the experience of the Kuku’s repeated migrations. She then presents several cases in which people who have repatriated to Kajo-keji from elsewhere have renewed their view of Kajo-keji, finding their home through their lives there. The author attempts to answer the aforementioned questions through the case studies.

The Kuku are an ethnic group in South Sudan whose homeland is considered to be Kajo-keji county, a border area between South Sudan and Uganda that lies inside the country’s Central Equatorial State. The Kuku, an eastern Nilotic people, use the Bari or Kuku language. While both the Kuku and other South Sudanese recognize Kajo-keji as the Kuku homeland, history shows that they came from northern Sudan.

Kajo-keji, the nickname of a famous Kuku chief, was applied to the area by Belgian forces during the colonial years. Many of the Kuku people had to seek refuge or migrate because of colonialism, civil wars, and so forth, and that experience has had a great effect on their notions of home.

The first case cited by the author in support of her thesis is the reburial of a well-known Kuku rainmaker. Members of the Kuku living in Khartoum—the capital of Sudan—supported the reburial of a famous Kuku rainmaker from Juba, the current capital of South Sudan, to Kajo-keji in South Sudan. Reburial is a popular practice among the Kuku, not only for rainmakers, but also for ordinary persons. It manifests the Kuku's desire to 'bring back' their relatives or family members who died during migration to their 'home' of Kajo-keji. The custom is thought to have been established after the Kuku migration began. The support for the reburial of the rainmaker from Juba to Kajo-keji by people in Khartoum suggests that the Kajo-keji was selected as the Kuku homeland through meetings and discussions by various Kuku in their various migration locales, along with the interaction among Kuku people in various places. In addition, judging from a case study of the meeting of a Kuku youth association in Juba, it appears that Kajo-keji is more than just the name of 'the home of Kuku' and a symbol of the Kuku people; it is also accepted as such by all of the people in the region. Through those processes, Kajo-keji has become the home of the Kuku and others who come from the area.

The case of a recently repatriated family is also instructive. Following the end of the Second Sudanese Civil War, this particular family repatriated from Khartoum. For a number of reasons, the family members live in different places in South Sudan: some live in Juba, another in a college dormitory in Kajo-keji, and others in the village of Kajo-keji. The different places of residence have made the respective experiences of repatriation different for each family member. Certainly, life in the 'home' differs for each of them; in fact, each of them has found a different 'home'. For example, a dormitory in Kajo-keji serves as the home of the second daughter of the family group living in Juba, who sometimes visits Kajo-keji. In contrast, the village of the father is the home of the lastborn boy, who lives there with his uncle's family, which used to live in Uganda. Yet when those family members meet and talk with 'the others,' for each of them, Kajo-keji is considered their home.

Through such case studies, we can understand that human migration is highly important to making a certain place a home. Because home is decided for relative reasons, two seemingly contradictory issues—the idea that the relationship between home and human is changeable and multiple, and the idea of the home as a very important place (as it can hold people's rights) —can coexist.